

2014.2.8(Takabe)

Japan Education Fair in Indonesia

大阪大学 高部英明 (takabe@ile.osaka-u.ac.jp)

【本原稿は、大学国際化 G30 事業の最終年度の海外説明会としてインドネシアの 2 都市で開催された留学フェアに日本の 10 大学と参加した様子をまとめたものである。第 1 版(1/30)、2 版(2/4)、3 版(2/8)】

1. はじめに

文部科学省の通称 Global 30 事業に採択された大学を中心に 10 の大学が、インドネシアのジャカルタとヨグヤカルタで留学を考えている高校生や大学生に大学紹介を行った。ただし、G30 は「全て英語で教え指導する」ための国際化プログラムであり、全て英語で対応する。各大学平均 3 名程度の教員が参加しており日本側は約 30 人の団体である。

私は、団体旅行は苦手だ。以前、やはり国際化の関係でタイのバンコックに関西の 4 大学で出かけたことがある。所が、朝から晩まで団体行動で、街をぶらつく暇が無い。異国の街の趣は自分の足で目的地を決めずにぶらぶらと歩いてみないと味わえない。だから、昨年も開催されたインドネシア・フェアには参加しなかった。同時に私はイスラム教圏が苦手である。(その理由については最後の付録を読んでください)。

今回、1 月 24 - 27 日と 4 日間、高校訪問や英語コース説明会に参加した。一番の成果は、大学のグローバル化に努めている 10 の大学の先生や事務の方と知り合いになれたことだ。沢山の情報を頂いて喜んでいる。23 日の関空一泊直通便から、5 泊 6 日（1 泊は帰りの機中）の印象を書き残してみた。

2. バリ国際空港に着

関空で日経ビジネスの特集「中国の次のアジア＝立ち上がる新興 11 カ国＝」という本を買う。インドネシアの一人当たりの GDP は 3,500 ドル。豊かなマレーシアは 9,700 ドル。ベトナムは 1,400 ドル。かなり中産階級が誕生し購買力が伸びているようだ。日本は 46,500 ドル。シンガポールは 49,300 ドル。中国は 6,600 ドル。ASEAN の中ではシンガポールは突出しているが（12 月訪問したが、物価は日本より高い）、インドネシアも富裕層が増えているようだ。なんと言っても、産油国で有り天然資源に恵まれている点がマレーシアに似ている。しかし、高速道路網が走るマレーシアと異なり、道路などのインフラが整備されていないようで都市部では慢性の渋滞状態だ。ジャカルタでは「ジャカルタ市民が持つ車やバイクをジャカルタのあらゆる道路に並べると車が余る」と言われている。政府のリーダーシップに欠けるようだ。中国共産党のように無慈悲なまでに退去命令を出し、四川省の山奥にまで片側 2 車線の道路を作ると、万里の長城のように後世の人は馬鹿だと言いながらも便利

であろう（ちなみに、私が四川省の李白の生家に案内された10年ほど前、この立派な道路に車はなく、唯一、牛車を引くおじいさんとすれ違った）。

さて、旅行代理店に今回の予定を伝えたらガルーダ航空の「バリ島」経由の便を予約してくれた。バリ島は日本人観光客が一番多いそうなので直通便が関空から出ている（帰りに知ったが、成田、札幌も直通便有り）。バリ島は一度訪ねてみたいが「バリ島大学」があるわけではないので、私費でないと滞在できない。乗り換えの2時間、外に出て歩いてみた。やはり、新婚さんなど観光客が多くてドル箱路線なのだろう、空港はモダンな真新しい建物になっていた（図1）。



図1 バリ国際空港。バリの伝統を取り入れたモダンな建物

そこから隣の国内線に乗り換えようと国内線カウンターに向かうと、沢山のLCC (Low Cost Carrier) のカウンターが並ぶ（図2）。12月にマレーシアでクアラルンプールとペナン島を往復するのに Air Asia を利用したが、革張りの立派な椅子で通常の便と何ら変わらなかった。ところが、荷物の超過料金の事を知らず、確か、15kgまでは5千円、それを越えると1kgごとに2千円。知らずに旅行鞆をそのまま持参したので、結果として人間より鞆代の方が高く付いた。まあ、勉強代。インドネシアは何と13,000程の島からなる国家。どこに行くのも飛行機だからLCCが発達したのでしょ。



図2 バリ空港の国内線LCCカウンター。10程度のLCC航空が営業している。手前がAir Asia。

そして、若干遅れてジャカルタ空港に着いた。夜8時頃。バリまで7時間、ジャカルタまで2時間。疲れたので早くホテルでシャワーを浴びたい。服装は大阪のまま汗びっしょり。ところが、荷物が出てこない。そこで、ガルーダの事務所に行く。ここで、荷物がバリに残っている事を確認するのに2時間かかった。明日の朝10時にホテルに届けるという。そこで、「こんな服装で、明日の行事に臨めというの。Compensation（補償）は」と聞くと「two hundred thousand rupiah（20万ルピア）差し上げますから良いですか」と言う。大きな桁に頭の中が計算できない。まあいいや、ごねてはかわいそう、と即断し、OKをだす。後で計算したらわずかに2千円だ。これで、下町に出かけTシャツ・短パンでも買えというのか。先のモロッコの後、ロンドンに着いた時、荷物がなくなり、寒くて文句を言ったら、30年も前だが

British Air は2万円ほどくれた(物価の違い?、私が丸く見えるようになったから?)。

空港は市内から 40km も離れている。タクシーでホテルへ。早々に渋滞に巻き込まれる。何とかホテルについて料金は 20 万ルピー。何だ、タクシー代に化けちゃった。荷物は翌日、ホテルに着いていました。

3. ジャカルタの一流高校 2 校を訪問

G30 本部 (<http://www.uni.international.mext.go.jp/ja-JP/>) のホテルは直ぐ隣。朝の 8 時ロビー集合。ところが、バリとジャカルタの間に 1 時間の時差があることに気付かず、現地時間の 7 時に来た。待てどもだれも来ない。色々な場所を探すがない。ようやく、もしかしてと思い、時刻を聞くと 7 時過ぎだという。始めて気がついた。8 時に出直す。格好は着た切り雀のままだ。



図 3 生徒達に説明する校長先生

みなさんどんどん集まり、約 30 人のグループになる。名刺交換の時間だ。今回、約半分の方と名刺交換した。最初の高校はキリスト教系の私学で出来たばかりでまだ卒業生を出していない。しかし、富裕層の優秀な生徒を集めているようで、高校生は自家用車で通学する。会場に参加した日本の大学はブースを展示し学部の英語コースの説明をする。校長に案内され講堂に集まり、制服を着た生徒達に主旨を説明 (図 3)。



図 4 世界中の子供が好きなアニメ。阪大が誇る手塚治虫の Astro Boy (鉄腕アトム) が元祖だ。廊下の壁にあった。日本発はいくつある?

生徒に聞いてみた。「君たち英語上手だけど、いつから習っているの」答えは「小学校一年から習っています。学校の近くに英語学校が有り、そこで毎日習いました」。「高校の授業は全部英語なの」答えは「理系の教科は全て英語ですが、文系の方はどちらかというとインドネシア語が多いかな」。この高校生、英語は達者でした。この国はインドネシア語の音をローマ字表記で表現するため一見、英語かインドネシア語か看板など見ると迷います。似た単語も多い。日本で言えばカタカナ表記。日本語を全てローマ字で書いていると思えば良い。単語も彼等の発音通りに書くから National も綴りが少し異なるだけ。

ベトナムは「クックドゥー」というスペイン語系の発音記号を増やしたローマ字を使っている。これは、日本に鉄砲が伝来した頃、既にベトナムに来ていた宣教師が、現地の言葉をローマ字風に書く方法を考案し、それが今日の国語になっている。ベトナムは中国と2千年近く戦争しているので、当然、最初は漢字が文字として入ってきた。しかし、それを嫌い、クックドゥーを現在は使っている。日本も戦後一時、ローマ字表記を標準にしようという動きがあったと聞いている。日本語を守って良かったとこのような時、感慨にふける。

ブースでの説明の前に参加大学10校の各校3分間紹介だ。各大学ともきれいなPPTを作ってきていて感心。阪大は少し固すぎる。名大、京大はノーベル賞学者のオンパレード（でも、この国の高校生はノーベル賞の価値を知っているのかな）。阪大の唯一世界に誇れる卒業生は「阪大医学部出身の手塚治虫。元祖アニメの先輩」だ。残念ながらノーベル賞受賞した卒業生はいない。別に恥ずかしいことではない。某理事は12月にサンフランシスコで私の親友の米国人に「阪大はどうしてもノーベル賞学者がほしいんです」と言っていたそうだが、恥をばらまいているような発言だ。

短い訪問の時間を終えて、昼食のために新しいショッピング・モールの近くまでバスで移動した。このような機会にいい人との出会いがある。某先生と挨拶し、色々話した。先生は2年前に退職し、今は特任で大学の国際化を助けている。私も後、4年少々で退職であるが退職金はいかほどあるのか、年金はいくらなのかなど知らない。退職して路頭に迷うようだと大変だが、しっかり予備知識を付ける暇も無いし、その気もない。この先生に退職に向けた心がけを色々教えていただき良い土産となった。同じ職場の先輩方にはプライバシーの侵害のようで聞きにくい所を、ずばりと質問して教えていただいた。

さて、昼食はモールの中で勝手に取る。入って直ぐにラーメン屋があったので阪大二人とそこに決めた。唐揚げチキンラーメンが一杯500円。途上国なのに高い。他の店も日本と値段が余り変わらない。それでもこんな大きなモールが出来ているのは当然、年収が日本人並みの人達が沢山いるからだ。確かにこの辺りは高校といい、校外の高級住宅地と聞いていたが、値段を見て回りびっくりだ。途上国に来る楽しみの1つは驚くほど安くて美味しい食事をする事なのに。この後、色々な所で食べたりしたがやはりジャカルタの近くは皆高い。最近、高所得者がジャカルタに集まろうとする傾向があると聞いた。たぶん、貧富の格差が広がっている。車の台数が多いし、ガソリンも1リットル120円と日本とそんなに変わらない。それなのに、車であふれかえる大都市。富裕層が多数生まれている証拠だ。ジャカルタ市の人口900万人、車20万台、バイク900万台。通勤時間帯は車には3人以上乗らないと違反。

それでもタクシーは安い。初乗り60円。市内はどこまで走っても300円程度。翌日、大学に行く際、メーターを1桁間違えて230円を2300円と思い、250,000ルピア渡して出たら、一緒に乗っていた卓さんが「運転手が、お釣りが無いと言って200,000ルピー返してきました」と、私に返してくれた。人間は極めて正直な民族のようだ。タクシーなど公共の交通機関の料金は極めて安い。これは中国でもそうだ。中国は10元（今は元が高騰して170円）タクシー。初乗り10元だから気軽に遠くでも乗れる。日本はなぜ、あんなに高いのだろう。安くして庶民の足にすればいいの

に。結局ここにも過剰な官僚による規制があるのだろう。中国の場合は地下鉄もメチャ安い。バスも。どうも所得格差が大きくて高くすると暴動が起きかねないので政府が補助金を出しているような気がする。インドネシアも同じでは。

午後にはもう一つのイスラム教系の進学校を訪問した。こちらではまず、式典があり宗教省の大臣の挨拶があった。この高校は宗教省直属の国立高校でイスラム教精神に則った超エリート校。入学試験倍率 60 倍。合格すると学費も生活費も全て国が支援。全員寮生活。大きな講堂には図 5 のように「歓迎、ジパングの大学の皆さま」のような立派な垂れ幕が掲げられていた。



図 5 講堂のひな壇には大きな垂れ幕が掛かっていた。日本は「Jepang」だ。ここにはマルコポーロが残した「黄金の国ジパング」の呼び名が残っていた。

この Insan Cendekia 高校（ www.ic.sch.id ）は、大学入試で使われる「全国統一高校卒業資格試験」の平均点が全国 2 位で、学校の紹介にも今まで送り出してきた科学オリンピックの生徒達の名前が書かれている。すばらしい成績だ。日本から国際物理オリンピックの代表選手 5 名を送り出す物理オリンピック日本委員会（ <http://www.jpfo.jp/ipho.html> ）の設立に 2005 年、世界物理年の年に物理学会理事として関与した私はその難しさを良く知っている。インドネシアは昨年の成績は 5 名中 4 名が物理で銀メダルである。国を挙げた特別なエリート教育が成されているのだろう。ちなみに、「どこが第 1 位なんですか」と質問したら Denpasar（バリ島の空港がある所）が全国一位とのこと。たぶん、バリ島には裕福な人が多いのだろうと思った。



図 6 阪大ブースに質問に来た女子生徒達。

さて、各大学の紹介が終わって生徒達が自由に各大学のブースを尋ねて質問する時間になった。阪大のブースにも図 6 のように、まだ幼いムスレムの生徒達が質問に来る。大西先生とトーストデン君が質問に答える。皆英語は達者で余り違和感はない。高校を 2 校訪ねてなかなか興味深かった。やはり若いと云う事は良いことだ。幼さと生意気な大人が同居している感じがする。何となく元気をもらったような気持ちでホテルに戻った。

希望者は一緒に夕食をしましょうというので、参加することにした。私の周りには某先生と東大、北大の関係者。10人で2人だけソフトドリンク、後は皆、ビールで乾杯。私は現在「禁酒」中でソフトドリンク。何度も誘われたが誘惑に負けずに飲まなかった。昨年末に2ヶ月ほど毎日飲んでいて正月休み、体調を壊した。どうもアルコールが負担になったようなのでしばらく止めることにした。飲み会では色々面白い話が聞ける。ここはG30本部のホテルの地下のレストラン。日本大使館から同行してくれた現地の方が案内してくれた。2時間もいただろ



図7 会計をしている東大・山口さん、北大・石倉さん。金額が二桁多いので、大金持ちの気分。

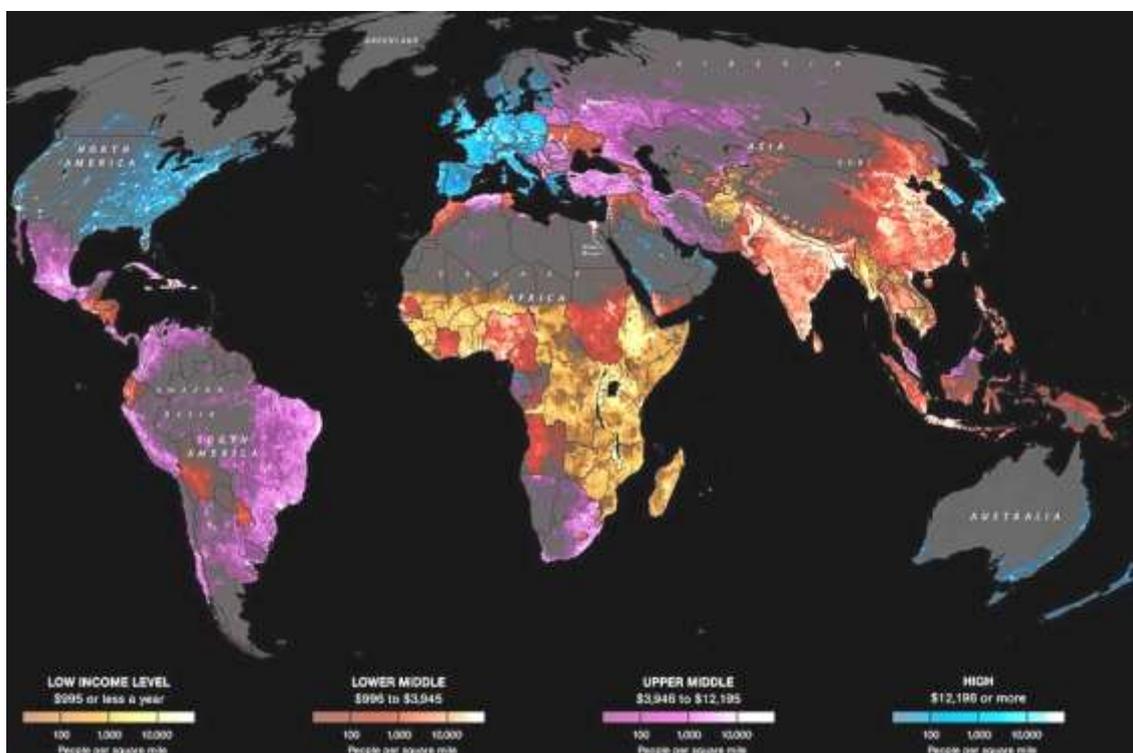


図8 一人の年収の平均額を色にした地図。確かにジャワ島はLMで人口密度が高い

うか、食事も食べて、一人平均2000円強。東大と北大の写真7の二人が会計をしてくれた。あまりにもお札の額が多いので計算に惑いながらも何とか会計を済ませてくれた。

物価が高いと書いた。この日、ロシアの友人 Sergei Blinnikov の facebook に Washington Post 誌の記事を引用していた。タイトルは「40 more maps that explain the world」と言う記事。最初の地図が図8の「所得と人口密度の分布」。「Those dots

represent people: the brighter the dot, the more people. The color shows their country's average income level: blue is richest and yellow is poorest.」

4. ジャカルタの大学でのフェア

翌日、1月25日(土)は9:00にフェア会場となるアル・アズハル大学へ現地集合。統合理学コース(化学・生物・高分子の大学院英語コース)の卓さんと同じホテルなのでタクシーで一緒に出かける。大学に着いて支払う時、先に書いた桁違いがあった。ブースを阪大から来た4人で設置し、9:30からG30本部の挨拶。文部科学省からも高等学術局の庄司調整官が来ていて、挨拶をした。私は彼とこの日と翌日、色々話



図9 準備万端。阪大ブースの面々

をさせていただいた。この日は名刺を出して彼に質問「庄司さんは大学の国際化の最大の問題点はなんだかご存知ですか?」と始めた。すると彼は「それは教員の頭の中の国際化だと考えています」とまさに正解を答えてくれたので嬉しくなった。「まさに、その通り。よくご存知ですね」。阪大のブースに4人が並んだ。開始前に記念撮影。図9、左から、地元インドネシアで張り切ろうとしていたクレメント君が寸前で娘の水疱瘡(chicken pox)が移り、日本の水疱瘡はDNAが異なるせいか2度目の水疱瘡で参加を断念、ピンチヒッターで来た同僚のトーストデン助教(ドイツ人)、大西教授、高部、卓助教。10時に学生達がドッと入場してきた。10大学のブースを目踏みしながら希望する大学のブースの前に来る。インドネシアということで農業や経済、工学、生物に人気がある。阪大には学部の英語コースは人間科学と化学・生物のコースしかないというとなるとがっかりする高校生が多い。他の大学に比べても学部の英語コースが少なすぎる。



図10 JASSOのブース垂れ幕

。地元の高校生には阪大は不人気に写る。今日は1000人を越える学生が10時から3時までの5時間に五月雨式にフェアに参加した。会場正面には図10の留学生奨学金を扱うJASSO(<http://www.jasso.go.jp/index.html>)の大きな垂れ幕が掛かっていて、学生が常に集まっていた。やはり途上国、奨学金が大学以上に關心事である。JASSOは文科相傘下の独立行政法人であり、阪大ではFrontier Lab Programという交換留学生の奨学金などでお世話になっている。また、日本大使館も国費留学生募集の案内

のブースを出しており、ここも学生が常時、群を成していた。大使館推薦の留学生数は意外と多く、どんどん増えている。数百人が授与されて、日本の大学に進学している。

さて、今日と明日は説明会に並行して「模擬講義」が4件ずつ用意されている。私は Engineering の講義を30分してほしいと言われ、図11のような大胆なタイトルで講義をした。インドネシアも地震国、また、台風の発生地帯に近い。だから、こういう題目だと高校生も大学生も関心を持つだろうと、日頃の知識を確認する意味も込めて用意した。物理が専門なので講義では地震のエネルギーが波動として広がる事、地震の波動には4種類有り、短い時間にそれぞれの波動が到達するため大きな揺れとなること。そして、海面の上昇や沈下は非線型な界面の表面波として伝わり、通常の浜辺でサーフィンをする大波との違いを説明。とにかくキーワードは「波動」。波動とは何かを Euler の流体方程式も示して説明する。学生にはショックか知らないが地震のエネルギー Magnitude を図12のように水爆のエネルギーと比較。地震の巨大さと水爆の破壊的エネルギーをリンクさせて実感させるためだ。阪神淡路大震災は $M=7.2$ で水爆1個分、東日本大震災は $M=9.2$ で計算すると、東北沖海底で水爆1000個が爆発した計算になる。いかに地震が巨大なエネルギーを地下で放出するか学生にも実感できたと思う。私は地震の科学を説明し、それを工学としてシミュレーションすることで事前の被害の予知をするシステムの可能性について最後に述べた。仕分けで有名になった神戸の「京」スパコン。今は次世代「エクサ」が議論されている。これが出来ると時間的に地震や津波のシミュレーションを被害が起こる前に終わることが出来、データを被害が予測される地帯に流すことが出来る、かも、と、前日の夜、ホテルで結論づけた。

しかし、人に当てられたというか、かなり疲れた、が、このまま次のフェアの開催地に飛行機で移動しなければいけない。空港にフライトの4時間以上前に着いたので早い便に変更しようとして阪大4人の変更を申し出たが2時間に及ぶネゴの結果、結局、7時過ぎの当初のフライトになってしまった。かなりけんか腰で

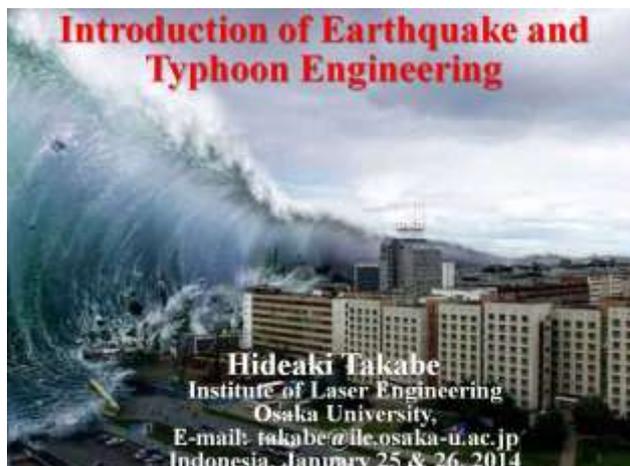


図11 30分の模擬講義。工学の講義。地震や台風の科学は人を被害から救う工学になりうるかが課題



図12 1950年代の水爆実験。この爆発エネルギーは神戸大震災のエネルギーに相当。この水爆を神戸の地下10kmで爆発させると同じ被害が出る。核兵器は恐ろしい破壊兵器である

やりとりしたが、Check-in カウンターで頼りない男の受付とやりとりしている間、彼はどこかに消えて、あえなく早い時間のフライトの搭乗時間が過ぎてしまったのだ。

5. ヨゴヤカルタの大学での説明会

26日(日)はジャカルタから500km東に移動した「インドネシアの京都」と形容される Yogyakarta 市の Gajah Mada (ガジャ・マダ) 大学でフェアを行った。フェアは11時から4時。この大学は「インドネシアの東大」と形容される最高学府で阪大とは協力協定を結んでいる。この日は天気がとても良く、外は暑い一日であった。街並みは雑踏としたジャカルタに比べ、タクシーから見る限り区画整備されてきれい。気に入りました。朝食の時、日本人の夫婦に声を掛けて聞いたら「旅行代理店が良い街並みですよと推薦してくれたので来ました。今日は郊外の仏像など見学予定」とのことだった。良い所なんだろう。

大学までタクシーで出かけ、ブースの準備。昨日と同じだが、蓋を開けてみるとすごい人数。5時間で3000人は参加したのではないかと。色々な質問に答え、今回は私が責任者の国際物理志望もだいたいぶいた。ガジャ・マダ大学には物理学科もあり、定員が70名と多い。教えている先生が「博士の学位が海外でないと取得できない。阪大に行きたい」などのリクエストがあった。郵送していた沢山の資料は2時間ほどですべて持ち去られた。子供にお母さん、お父さんと思われる家族が着いてきているケースもかなりあった。教育熱心なんだ。最近ではインドネシアの大学の授業料が物価同様高騰し、海外の大学に進学する生徒が増えているそうだ。行き先は米国、豪州、シンガポール、香港、ドイツ。とにかく英語圏。毎年10月にはシンガポール、香港、豪州から大学案内が来る。日本も欧米での受験申請開始の10月にフェアをやるべし。日本の英語コースの情報が行き渡れば沢山留学生が来るはず

だと大使館のスタッフの方がバスの中で話していた。



図 13 この日のフェアはすごい数の参加者で大きなホールは立錫の余地がないまでに人で埋まる。外の受付にはまだ長い列が。



図 14 模擬講義。チャドル姿が目につく。

私は1時頃から質問入れて40分、模擬講義をした。今日の会場はだいぶ大きく、写真14のように会場は超満員。立ち見をしていた学生に始まる前にカメラを渡し、写真を撮ってもらった。講義を終えて質問時間。質問がないので、ここで説教をたれる。「日本の諺に『聞くは一時の恥。聞かぬは一生の恥』という言葉がある。君たち質問は本当にないのか。自分を奮い立たせなさい。勇気を出して何でも良いから質問しなさい」。

すると、手が挙がった。合計4件の質問があった。最後の質問は「先生はどうして科学者になろうと考えたのですか」。これには素直に私は工学部電気工学科出身で核融合エネルギーという工学を研究したくて研究者になったが、研究する内に核融合はまだ理學段階だと云う事に気付き、その複雑な理學に惹かれて、宇宙物理まで手を出すようになった。自分は自然現象の節理を窮めることが好きだと云う事に気がついて科学者に転向した、という話をした。時間超過で、次の先生にバトンタッチした。講義を終えて教室を出たら女子学生が「先生と一緒に写真撮らせて下さい」と言ってきた。もちろん、喜んで。皆素朴で純情で恥ずかしがり屋の大学生だ。勇気をふるって申し出た様子。



図15 大学生からツーショットを頼まれた。

ブースの部屋に戻ったら、文科相の庄司さんがいたので、話しをした。大学の国際化の関係で今一番気になるのは「**スーパーグローバル**」(以下参照)

文部科学省 HP:

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/036/siryo/icsFiles/afieldfile/2013/10/24/1340612_01.pdf

News 記事 <http://matome.naver.jp/odai/2137508524606360301>

当初予算を財務省から削られたので額は以下(URLより)とは異なり99億円(ただし、純粋には70億円程度)と少なくなったが、上の文科相 URL 資料には

○ **スーパーグローバル大学事業156億円【新規】**

1,040,000千円×10件

260,000千円×20件

大学教育の国際標準化、研究力向上に繋がる教育力の最大化を図り、ランキングトップ100を目指す力のある大学(トップ型)や、教育環境の国際化推進など、これまでの実績を基に更に先導的試行に挑戦し、我が国社会のグローバル化を牽引する力のある大学(グローバル化牽引型)を支援。**30大学選定(H26-H35)**

と書いている。10年間の計画でトップ10は年額10億円である(5億円に減るか?)

それでも大きい)。これは絶対逃すわけにはいかない。

庄司さんの説明では、現在、公募文案を作成中で有り、4月に公募、審査結果は9月に通知して、採択された大学は10月から事業開始。阪大がもしこれを逃すと、国際化や研究型大学への道が閉ざされることになるとも言える。私は庄司さん大学の国際化の現状と課題について議論させていただいた。詳細は省く。

これで、G30本部事務局が用意した3日間の公式行事は終了した。今回知り合った東大、名大、北大、九大、立命館、千葉大、京大、慶応大などの大学関係者と挨拶して別れた。外は強い太陽の日差しであり、タクシーを捕まえて空港近くの Sheraton Hotel に戻ることにした。



図 16 庄司氏との異国の地での記念撮影。

6. ジョゴヤカルタの2高校を訪ねる

最終日、午前・午後とクレメントさんがアポを事前にとってくれていた地元の高校を2校訪問した。午前は SMA Bopkri 1 Yogyakarta 高校。キリスト教系の高校。高校に着いたが連絡が行っていなかった。対応してくれた先生が、せっかくだからと、自分の講義時間を割いて高校生と話す時間をくれた。彼の授業は「宗教」だそうで、話のための部屋に入って、床に座って話をした(写真 17)。やはり、皆、恥ずかしがり屋で、阪大の英語コースの紹介を大西さんがしても質問がない。そこで、私がバトンを引き受け「みなさん、日本のアニメーションの話をしてしょう。次の作品を知っている人、手を上げて」、「One peace?」、ハーイーとケラケラ笑いながら沢山手を上げる。「Konan」、ハーイー。「Naruto」、ハーイー。と言う調子。少しほぐれてきたので、皆の将来の夢に話題を移す。近くの子を指名して「君は将来何になりたい?」と聞くと「oil company で働きたい」(なるほど、インドネシアらしい)などと、次々と指名して答えを引き出す。



図 17 宗教の授業を借りて、高校生と話す。

このクラスを後に、化学を勉強中のクラスに入る。ここでも、阪大のプログラムを紹介し、我々4人が自己紹介をした。私が自己紹介の中で日本人は無宗教が多い、と発言したと思う。生徒から質問が来た。「日本は神道(Shinto)ではないのですか?」と。太平洋戦争の亡霊を見たような気分になり、正しい情報を伝えておこうと、宗教

論を述べた。

「日本人の宗教を語るには、まず、宗教とは何か、の定義から始めなければいけない。私は30年前ミュンヘンにいてとても敬虔なカトリックのFischerご夫妻に色々な教会など連れて行っていただき、カトリックというか Christianity (キリスト教精神) がいかなるものか自分なりに理解しているつもりである。それによると、キリスト教は貴方達が朝、目が覚めた時から、布団の中で眠るまで、一日の行動規範を与えるものです。そして、一人で何かする時も神が常に貴方を見ていて、正しい行動をとるか確認している。いわば、宗教とは人間の行動規範を与えるもので、道徳と繋がる所がある。その意味では日本では仏教や神道やその他の宗教より、むしろ儒教 (Confucianism) の方が道徳、生活規範という意味で日本人には大きく影響している。」と回答した。納得したようだ。

次の学校訪問まで時間があるので、街をぶらつきながら店を探そうと思ったが、先生が「この近くにはレストランは無いよ」という。そこで、彼が教えてくれた「レストラン」なる店にタクシーで行く。外が暑く、結局、市内巡りは止めて、ここで時間になるまで3人でだべっていた。この周りを見る限り、ウインドーショッピングなど出来るような街ではない。そもそも、歩道がない。まだまだ、途上国の街です。

次の高校 (SMA Budya Wacana Yogyakarta: <http://smabw.sch.id/>) は、しっかり連絡が届いていた。校長先生以下多数で出迎えてくれた。「この高校には米国と中国の大学の方が訪問されたことがあります、日本からは初めてです」(若い女性が通訳) と歓迎してくれた。ここは、先の高校より英語教育は今一つのように、生徒に挨拶する



図 18 中央が校長先生。向かって左端が通訳の女性

にも女性の通訳がはいった。グラウンドに「ござ」(懐かしいな) を引い

て、生徒達が校長先生の話や、我々4名の話を聞いてくれた。卓さんが私は韓国人ですと言った時、生徒達から、すごい歓声が上がった。韓国政府は韓流ドラマの版權を全て買い上げて、世界中の国の放送局が自由に使えるようにただで提供している。だから、東南アジアや南アメリカなど韓流ドラマが大好きで、卓さんが韓国と聞いた途端に「韓流ドラマのヒロインが来た」かのようにざわめいた。韓国政府は味な真似をする。日本もどんどんテレビドラマなどただで提供して、日本のことに親しみを持ってもらうことは戦略的にも大切だ、と日頃思っている。

付録 モロッコでの若かりし頃の苦い経験

それは、30年前、ドイツにいた時、学生時代に見た映画「カサブランカ」のイングリッド・バーグマンの華麗なる美しさとハンフリー・ボガードの決してハンサム

ではないが、醸し出す男らしさに惹かれて、女房とカサブランカに出かけた時の以下のような経験が原因である。マドリッドでの滞在を終え、地中海を越えた時、確かに飛行機の中では「カサブランカ」、つまり、「白い家」が紺碧の海と調和し、とてもきれいで胸躍る思いであった。当時（1981年）は2つか3つ星の安ホテルを現地について確保するのが常。空港でホテルを確保し、ダウンタウンに着いた所からおかしくなった。名作「カサブランカ」の世界とかけ離れている。女性は目だけ出した真っ黒なチャドル。女房と二人でモスクを目指して歩いて行く。気づいてみると男女が日中から一緒に歩いていない。一間間口の店の日陰の中からさも眠そうな男性達が好奇心で私達を追う。

街の中心にモスクが見え始めたあたりから、人の雑踏が目に入り「あの中を行くのか」と思うと空恐ろしい気になり、これはかなわんと引き返すことにした。そうすると、市場のあたりでスーツを着た男性が「これは旅行客の方。ぜひ、この市場の中を案内いたします」という。まあ、時間つぶしにでは案内してもらおうと、彼に着いていく。すると、知り合いらしい革製品の店などに連れて行かれ、押し売りまがいに「これは格安だ、買いなさい、買いなさい」と言う。いや、旅の途中（この後、リスボン、ロンドン、ベルギーとゆく）だから何もいらないと言っても押しつけてくる。でも何も買わずに市場を出た。すると彼の紳士君が「案内料、（たしか）2千円」と要求してくる。これで一悶着。カサブランカの印象はどんどん悪くなる。



映画「カサブランカ」(1942年)ハンフリー・ボガードとイングリッド・バーグマンの主演作は何度見ても素晴らしい。ここには男の美学がある。

極めつけは、ホテルに戻ろうとした時、手首を切られた子供が左手の傷口を見せてきて、右手で「お金頂戴」のように迫ってきたことだ。イスラム圏はハムラビ法典の精神を継承していて「目には目を、歯には歯を」の世界。この子は泥棒を働いたから手首を切断されたんだ、と思いながら逃げる。逃げると追いかけてくる。何度か逃げていた時、地元の大人が子供を押さえてくれて何とか難を逃れることが出来た。この段階で映画カサブランカの世界と真逆の世界に降り立ったことを実感する。そこで、スイカを買ってホテルに戻ることにした。

スイカを食べた夜、下痢にうなされた。女房は何ともなく「精神性の下痢ね」と女房の診断。私は不潔や残虐は苦手なのです。ゴキブリのようにたくましい女房は今日予約した明日のマラケシへのツアーを楽しみにしている。しかし、翌朝、私は到底、さらに奥地に行く気持ちではなく女房を説得してマラケシはキャンセル（返金無し）。そして、ホテルも米国系の五つ星ホテルに変更。カサブランカ滞在中はここで過ごし、リスボン行きのフライトまで3日間をホテルの中だけで過ごした。あきれぬ女房。頭をよぎるのは「カサブランカ」の中で黒人のバーテンがピアノを弾

きながら謳う「封印された歌」。「As Time Goes By」。何ともけだるいような、それでいて、哀愁を帯びたこの歌を覚えている人は、私より上の世代には多いだろう。

若い頃このような経験をしたことで、イスラム圏への旅行は全て辞退するようになってきた。マレーシアには友人が先に出来たので行ってみて、多民族国家で友人は中華系であることからすでに5回以上出かけている（退職後の移住も検討している）。それでも、イスラム教の国、インドネシアは避けてきた（実はインドも何度か招待されたが避けている）。しかし、今回は G30 の最終でもあり、一度、試してみることにした。結果としてイスラムのイメージはかなり変わり、楽しい旅となった。

苦い話を書いた。口直しに、もう一つ私の好きな映画「モロッコ」もカサブランカに足を向けた理由である。主演はゲーリー・クーパーのニヒルな傭兵と街の酒場の踊り子、マレーネ・デートリッヒである。1930年の作品。デートリッヒはこの映画を契機に米国に移り、第2次大戦では反ナチの戦士として北アフリカの連合軍基地から有名な「リリー・マルレーン」の歌をロンメル将軍率いる最強ドイツ軍団に向けて放送していたことでも有名である。この映画も昔見て、未だに最後のシーンが頭に焼き付いている。傭兵のクーパーに惚れたデートリッヒは、彼が街を去る時、砂漠の中を砂に足を取られながら見送る様子。それが、ヒールを脱いで裸足になり、他の従軍慰安婦と一緒に彼の後を追う所で、映画が終わる。結局、私は映画にまんまと騙されて、モロッコに出かけたのである。しかし、女房は「いいえ、貴方が意気地無しだから。繊細すぎ」と未だに言う。「人類滅亡でも最後まで生き残るゴキブリに俺の芸術家的繊細な気持ちがわかってたまるか」である。



映画「モロッコ」。マレーネ・デートリッヒの曲線美は有名。傭兵のゲーリー・クーパーを本当に好きになってしまう。最後のシーンは印象深い。